流産と震災――わが子を抱く腕の輪の中に感じた宇宙　写真家・山田なつみ

米倉昭仁 2021.4.7 17:00 dot. #TOKΘYO #アサヒカメラ #リコーイメージングスクエア #写真展 #写真集 #山田なつみ #常世 #流産

ショスタコーヴィッチの森（撮影：山田なつみ）

写真家・山田なつみさんの作品展「TOKΘYO（常世）」が3月8日から東京・新宿のリコーイメージングスクエア東京で開催される。山田さんに聞いた。

【山田なつみさんの作品はこちら】

＊　＊　＊

取材前、山田さんからメールのメールには、今回の作品についてこう書かれていた。

＜子育てを通じて得た母としての成熟、なかなか分かり合えない夫と妻の格闘……いろいろなモヤモヤと晴れ間を経て、フィルムで撮る意味がまるで地下室に眠るワインのように、発酵によって味わいを増しているかのようです＞

展示作品はワインのように楽しんでほしいそうで、＜どちらもテロワール（大地）と時間が紡ぎ出した発酵物＞とある。

実際に作品を目にすると、子育てのように生み出されたプリントは墨絵のよう。画面の枠が滲み、絵柄のトーンもネガの階調をそのまま再現したものではなく、ムラとは異なる微妙な変化がある。作品によっては大胆にも墨汁を垂らしたような丸い跡が見える。それらが単なる絵柄ではなく、焼きつけられた印画紙の質感と相まって作品をつくり上げている。

エグレット・トラヴェルサン・アン・プティ・ヴィラージュ（撮影：山田なつみ）

■日本の原風景が雪室のような場所で完璧な状態で保存されていた

おもな撮影地は福島県・奥会津地方。三島町を中心とする山間の地域に小さな集落が点在している。

フランスの大学で写真史と映画史を学んだ山田さんがこの地で「TOKΘYO（常世）」シリーズは撮り始めたのは10年ほど前（「Θ」は死の神、タナトスをギリシャ語で表記した際の頭文字）。

「常世」とは、山田さんにとって、「胎内のような閉ざされた別世界」だと言う。

「あの世とこの世の間にある、子宮のような場所です。会津の小さな集落の暮らしを、その胎内に見立てています」

小さな限られた世界。そこに生命力があふれている。文化が生き生きと根づいており、根源的な豊かさを感じるという。

「円環をなすように親戚のつき合いとかも集落ごとに完結している。同じ『サイノカミ』という祭りでも、川をまたぐと違うんです。常世感というか、雪で覆われたなかで人々が非常に楽しそうに暮らしている」

初めて奥会津を訪ねたのは2010年春。7年間のパリ暮らしを終えて帰国した直後だった。福島県郡山市に住み始めた山田さん夫妻はドライブに出かけた。すると、「えーっ、何なんですか、ここは！」。「見たことのない空間」に衝撃を受けた。

コンビニどころか、似たようなチェーン店も1軒もない。ハウスメーカーの家もほとんどない。そこでみんなが雪下ろしをしている。

「目が外国人になっている身としては、日本の原風景が雪室のような場所で完璧な状態で保存されていたように見えたんです」

もともと、山田さんは山形市で生まれ育ったのだが、「風景の濃さがあまりにも違いすぎた」。

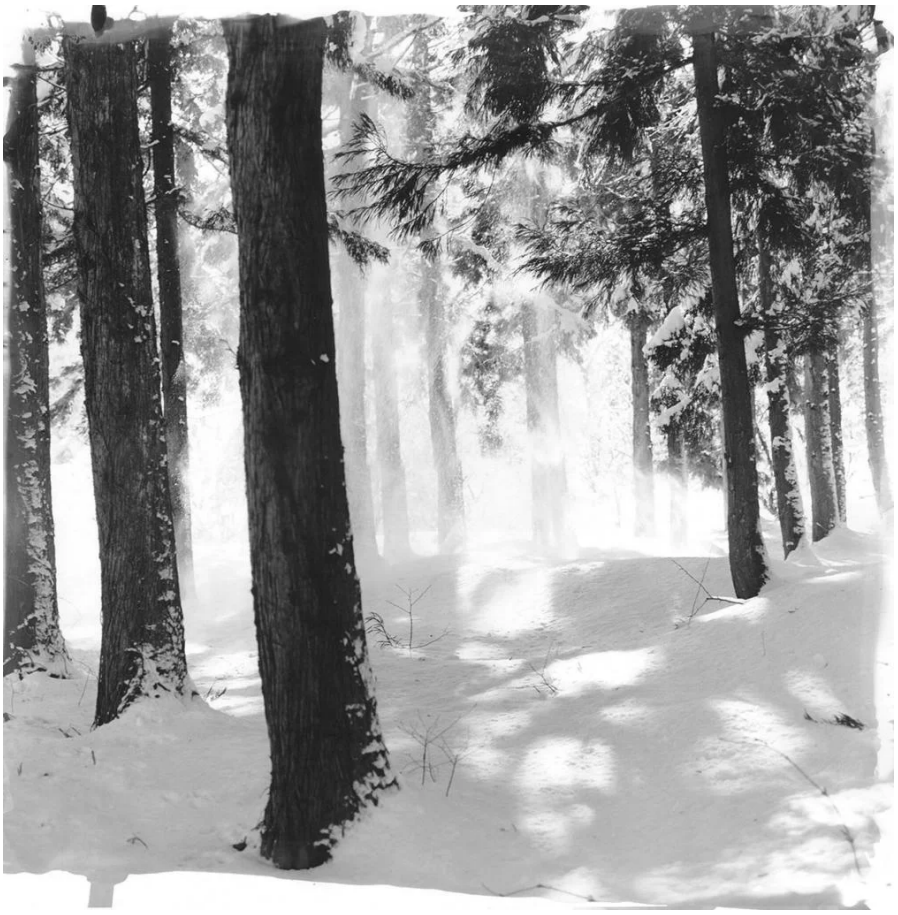
次のページ　**死んだ子どもに会えるような気がした**

1 2 3 次のページ

おすすめの記事

流産と震災――わが子を抱く腕の輪の中に感じた宇宙　写真家・山田なつみ

米倉昭仁 2021.4.7 17:00 dot. #TOKYO #アサヒカメラ #リコーイメージングスクエア #写真展 #写真集 #山田なつみ #常世 #流産



アリヴェ・ドゥ・デュ、サイノカミ（撮影：山田なつみ）

■雰囲気がほんとうに美しくて、死んだ子どもに会えるような気がした

　そんな風景に魅了され、父親から譲り受けた中判カメラ、ゼンザブロニカにモノクロフィルムを詰めて撮り始めた。

「デジタルカメラでも写したんですけれど、しっくりとこなかったですね。あまりにも景色が素晴らしすぎて、デジタルで残すのがもったいないというか。色や電子技術が介在すると時代性が入ってしまう。このままの状態を撮って保存するには、モノクロのフィルムじゃないと表現できない、と考えたんです」

　最初は「農作業をするおばあちゃんとかを『記録』として撮っていた」。しかし、すぐに「撮りたい気持ち、心情をそのままを記録する感じ」に変化する。原因は流産だった。

「非常にどこに行ったらいいのかわからない感じ」だった山田さんは、「すがるような気持ちで」集落を訪れた。すると、みんなが温かく迎え入れてくれた。

「撮影に行くと、『また来た』みたいな感じでもてなしてくれるんですよ。『今まで、元気してたか？』『あなたが好きなたくあんを漬けといたからね』とか、いろいろ話を聞いてくれたり。前に写した写真を見せると、とてもよろこんでくれて。すごく励まされ

た」

　さらに、「もう準備してあるので、撮ってください」と、言わんばかりの光景にたびたび出合った。

「腰の位置に霧が立ち込めているとか。振り返ると、村が水面に映っていて、えーっ、と思ったり。私が撮っているというより、カメラに導かれているとしか思えないような光景に毎回出合うので、ほんとうにどうなっているのかな、と。私にとって、ここは心がいちばん落ち着く場所でしたね。雰囲気がほんとうに美しくて、死んだ子どもに会えるような気がした」

プティット・フィーユ・ダンザン・シャン・ドゥ・コルザ（撮影：山田なつみ）

■原発事故の直後、菜の花畑で写しとった白昼夢のような光景

　ところが翌年、さらなる不幸が降りかかった。東日本大震災で郡山の自宅は「ぺしゃんこにつぶれてしまった。たまたま外出していたからよかったんですけれど」。

　流れ着くようにやってきたのは福島第一原発から直線距離で約65キロ離れた宮城県角田市。新しい住まいの裏には広大な菜の花畑が広がっていた。そこで白昼夢のような光景を目にし、シャッターを切った。

「そのとき、放射線の値がけっこう高かったんです。なのに、みんな和気あいあいと写真を撮ったり、子どもが駆け抜けていった。天国みたいな場所が広がって、ふわーっと浮遊しているように見えた。『いったい、ここはどこなんだろう』と。そういう事故が起きたときって、人々がののしり合ったり、物を取り合ったり、世紀末のような光景がさまざまな映画で描かれてきたのに、それとはあまりにも違いすぎて、もうどこにピントを合わせていいかわからないくらいすごく動揺したことをはっきりと覚えていますね」

次のページ　**モノクロ写真に宇宙のような広がりを感じる**

1 2 3 次のページ

おすすめの記事

流産と震災――わが子を抱く腕の輪の中に感じた宇宙　写真家・山田なつみ

米倉昭仁 2021.4.7 17:00 dot. #TOKYO #アサヒカメラ #リコーイメージングスクエア #写真展 #写真集 #山田なつみ #常世 #流産

フー・サクレ（撮影：山田なつみ）

　そのころ、2度目の流産をした。原因はわからない。

「でも、子どもが命、体を張ってというか、私に伝えたかったメッセージもあったんじゃないかな。たぶん、そういう出来事がなかったら『常世』をつくろうとは思わなかったでしょうし。生まれてこられなかったこと、というより、生命が訴えかけてくるもの。それはすごく意味深いと思いました」

■白と黒だけ写真に宇宙のような広がりを感じる

　それから3年後、待ちに待った子どもが誕生した。すると、写真に対する意識がさらに大きく変化した。それは、「撮ることというより、プリントすることの意味」についてだった。

「子どもがお乳を飲んで寝て、また飲んで。おしっこしたり、うんちしたり。それが全部、この『腕の輪の中』で完結している。それに気づいたとき、ハッとした。すごく驚きを感じました」

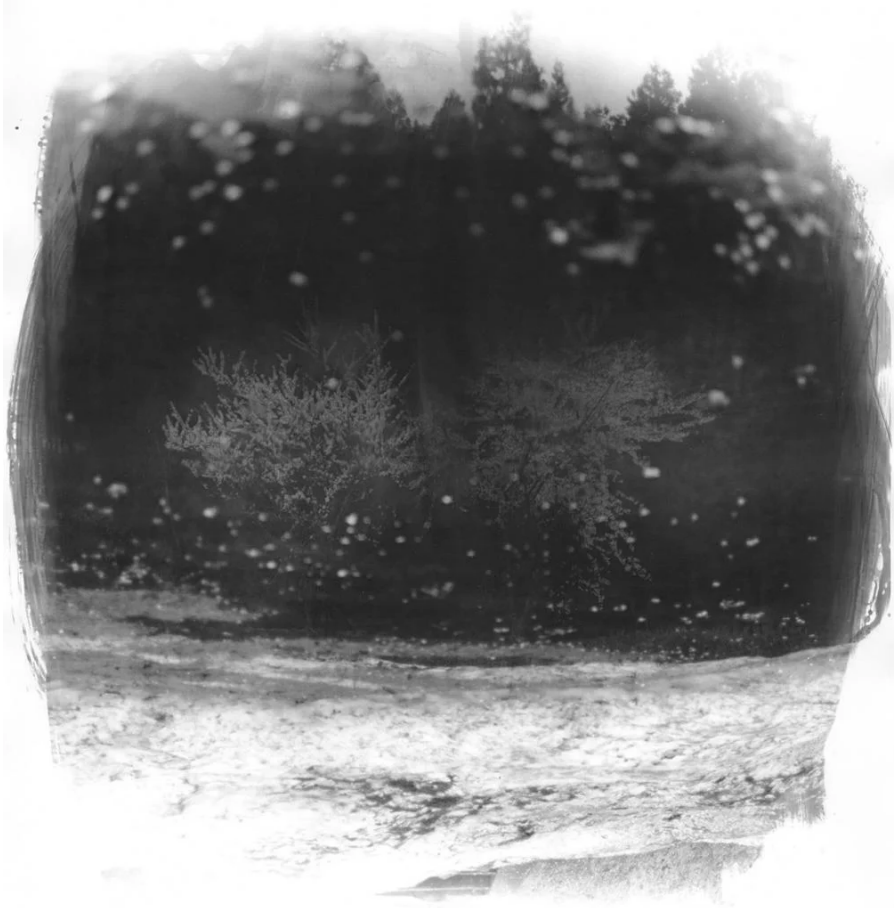
　山田さんはそう言って、子どもを抱くように両手をつないで輪をつくる。

　それまでは、ほかの写真家の活躍を知ると、「ヒマラヤとか行っているんだ」「いいなあ、うらやましいなあ」という気持ちが湧き上がった。

「でも、この腕の輪の世界もすごく濃厚で、宇宙があるな、と思ってから作品の見方が非常に変わってきたんです。時間をみつけては子どもをおんぶして暗室に入って、少しずつ焼き直していくと、自分の心象風景がさらに立ち上がってきた。新しい経験や視点、さまざまな要素が自分の中で反響して広がって、何回も何回も試して。その成長を『もの』として見届けられることが非常に面白い」

目を閉じて、額に集中していると、「白と黒だけ」の写真のなかに宇宙のような広がりがあることをすごく感じるという。

「得難い子育ての体験ですね。ほんとうにどこにも出かけられないのに。無限って、大海原にだけあるんじゃなくて、閉ざされたなかにもある。それにすごく気づかされた」



ブルニエ・ブラン（撮影：山田なつみ）

■与謝蕪村の辞世の句に感じるモノクロ写真的なもの

震災前、1度目の流産をした直後に雪の残る奥会津で写した白梅の写真がある。それを与謝蕪村の辞世の句、「しら梅に明る夜ばかりとなりにけり」と重ね合わせてプリントしている。

「いまから死んで広い世界に、梅の白さのなかに吸い込まれていくよ、というのは非常にモノクロのフィルム写真的だと思うんです。ネガを印画紙に焼きつけると、黒いところは白くなり、白いところは黒くなる。それがずっと交互に円環をかたちづくっているようで、この世とあの世のつながりを感じさせるんです」

（文・アサヒカメラ　米倉昭仁）

【MEMO】山田なつみ写真展「TOKΘYO（常世）」
リコーイメージングスクエア東京 4月8日〜4月26日。

会場では特装版の写真集「TOKΘYO」（私家版、A4変形、平綴じ、24000円・税別）を限定10部、販売する。桐箱入り。ブックカバーは「生命の樹」をモチーフに作家のデザインを刺し子で仕上げた。刺し子は角田市障害者就労施設「のぎく」の手仕事によるもの。バライタ作品1点と手刺しゅうのシリアル番号つき。

1 2 3

おすすめの記事